

Title	吉井勇の歌集『金泥』について
Sub Title	
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2019
Jtitle	三田國文 No.64 (2019. 12) ,p.32- 51
JaLC DOI	10.14991/002.20191200-0032
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20191200-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉井勇の歌集『金泥』について

田坂 憲二

はじめに

吉井勇の歌集『金泥』は、一九四五年の終戦直後、八雲書店が企画した『新日本歌集』の一冊として刊行されたもので、戦中・戦後期の吉井勇を考える上で極めて重要な資料である。また『新日本歌集』は、戦争末期の『決戦歌集』の焼き直しとも言える企画であるから、戦争と短歌の関係を考える上でも欠くことの出来ない資料である。

ところが、この『金泥』は、三度刊行された『吉井勇全集』（全八巻版、番町書房、一九六三年～六四年。定本版全九巻、番町書房、一九七七年～七九年。復刻版、定本版を版面複製、日本図書センター、一九九一年）に収録されてはいるが、全体の三分の一度が省略された形で掲出されており、その省略の方針も必ずしも筋の通ったものではない。加えて、歌集『金泥』そのものが終戦直後の刊行であり、公的機関の所蔵もそれほど多くなく、何よりも保存状態の良い本が少ない。原本の保存状況が悪く、広く流布している全集の本文には依拠することが出来ないとなれば、研究の基礎となる信頼出来る本文の提供

が必要となってくる。

また、歌集『金泥』は、既発表の歌を編集することで成り立っているため、いわゆる出典の究明がまず第一になされねばならない。ところがこの出典の究明は極めて不十分であると言わざるを得ない。そのことが、実は『吉井勇全集』の不可思議な本文提供につながっているのではないかと推測されるのである。

こうした状況を踏まえて、本稿では『金泥』の全歌の本文の提供と、テキストとして流布している全集との相違を明確にする。同時にすべての歌の出典を究明する。この本文と出典の研究に基づき作品としての考察を行うものである。

猶、二種の全集（復刻版はその性質上数に入れない）の『金泥』の本文校訂、巻末解説などに相違はない。本稿では『定本吉井勇全集』を用い、適宜『全集』と省略する。

一、『全集』に収載された『金泥』

歌集『金泥』は、『定本吉井勇全集』の第三巻一一一頁以下に本文が掲出されている。一一二頁に『金泥』の表紙書影を掲

げ、一二二頁から一二三頁までの一一頁分が本文である。『金泥』は、もともと菊半截判（A6判）で本文五四頁の小歌集であるが、『全集』の頁に換算して一一頁という短さになったのは、全文掲出ではなく抄出という形式を取ったことによる。巻末解説（五三九頁）には、『金泥』の成立事情などが述べられた後、抄出の理由と方法が以下のように述べられる。多少長くなるが、本稿の論述の骨子に関わることなので、当該部分を掲出する。

『金泥』は（中略）歌数百八十首。（中略）その中には『玄冬』に収載されている作品の重複がある。したがってそれらは削除した。その削除したものを念のために記しておくことにする。

「羅漢図」と「大徳寺」との間に「俵屋宗達」八首があるが、七首までは『玄冬』の「先達讃歌」中の「俵屋宗達」と同じである。

「落柿舎」と「油光院」の間に（一）「松尾芭蕉」七首、（二）「旅ごころ」九首、（三）「良寛を思ふ」七首があるが、（一）は『玄冬』の「先達讃歌」に同題によつて発表したものと同じ、（二）は同じく「騷旅旅情」の中の「旅ごころ」十二首中から九首を抄いたもの、（三）は同じく「先達讃歌」中に「僧良寛」として発表したものと同じである。

次に「蓮月抄」と「揮毫兀々」との間に「塙つくり」十二首があるがこれもやはり『玄冬』の「統洛北雑詠」にある同題のものと同作品である。

「揮毫兀々」は十一首であるが、その中の六首は『玄冬』

の「鉄斎遺墨」の中にあるものと同じである。

この「揮毫兀々」の次に「栖鳳を悼む」五首があるが、これは『玄冬』の「芸苑遺聞」の中の同題の十首から抄いたものである。

以上の『定本吉井勇全集』の巻末解説、並びに本文校訂の問題点を挙げる。解説の記述の順番に列記する。

（ア）「歌数百八十首」は正しいか。一部の歌を掲出する方式であるから、総歌数情報は正確でなければならない。

（イ）『玄冬』に収載されている作品の重複「それらは削除」とあるが、他の歌集との重複はないのか。もしあるとすれば『玄冬』との重複歌のみを削除したのは何故か。

（ウ）「羅漢図」と「大徳寺」との間に「俵屋宗達」八首があるが、七首までは『玄冬』の「先達讃歌」中の「俵屋宗達」と同じである」と述べられているが、『玄冬』との重複歌ではない残りの一首が、本文に見えないのは何故か。

（エ）（一）「松尾芭蕉」七首は『玄冬』の「先達讃歌」に同題によつて発表したものと「同じ」とありながら、本文一一八頁では一首だけが削除されずに掲出されているが、これは何故か。

（オ）「塙つくり」には蓮月を詠んだ歌もあり、この項目を削除することで、歌集の構造がわかりにくくなるのではないか。

（カ）「揮毫兀々」は十一首であるが、その中の六首を省略することで、鉄斎に関する歌を選んだ吉井勇の意図がわかりにくくなるのではないか。

(キ) 省略された「栖鳳を悼む」五首」は、その次の「栖鳳の冬」歌群とともに、竹内栖鳳に関する歌を並べた吉井勇の意図を尊重すべきではないか。

以上主要な問題点七点を掲出したが、そのうち(ウ)(ウ)の三つはケアレミスであろう。結論だけ言えば、(ウ)の総歌数は百八十二首（あとがきにあたる「巻後に」の歌を加えれば百八十三首）である。(ウ)の一首は誤って削除したものだろう。(ウ)の一首は削除し損ねたものであろう。これらは、単純に誤りを修正すればよい問題である。(ウ)については、巻末解説を書いた木俣修は「吉井勇研究」（番町書房、一九七八年）では、正しく「一八二首」と表記しているから、誤植の可能性もある。

(ウ)(ウ)は共に、『金泥』の歌集としての作品構造を保持することを第一義と考えているかどうかで、重要度が変わってくる。『全集』が『金泥』の歌集としての全体像の提示よりも、別の事柄を重視していたのであれば、止むを得ないことである。『玄冬』に収載されている作品の重複を避けるということが明言されているから、新作歌のみを掲出するということがあるうか。『金泥』の歌集としての形よりも、個々の短歌としての資料性を重視するということであろうか。そうした方向性に異論がないわけではないが、新出歌のみを掲出するということであれば、それも一つの考え方として尊重しなければならぬ。

そこで(イ)の項目が最も重要となってくる。『金泥』が、『玄冬』以外の歌集からも歌を引いてきているのであれば、『玄冬』所収歌のみを削除して本文を建てることには、ほとんど意味が

なくなるであろう。後述するが、歌集『金泥』は、出版社の意向で、短時日で編纂することを求められたものである。吉井勇はそれに応えるべく、複数の既刊歌集の歌を編纂して作ったものなのである。既刊歌集の中で『玄冬』という歌集のみを特別視する理由は何もないのではないか。このように考えれば、『金泥』の正確な本文提供と、既刊歌集との関係の全面的考察こそが何よりも必要であろう。次節でその本文を提示するが、その基本方針をあらかじめ記述しておく。

(イ) 『金泥』のすべての短歌を、〈新日本歌集〉版によって掲出する。仮名遣いやルビは原文のままとする。漢字は通行のものに統一する。

(ロ) 『金泥』の短歌の頭に、漢数字で通し番号を付す。あとがきにあたる「巻後に」の一首をのぞいて、総計一八二首となる。

(ハ) 『金泥』の短歌の中で『定本吉井勇全集』に収録されているものには、漢数字の下に、算用数字で『全集』の通し番号を付す。「巻後に」の一首をのぞいて、総計一二九首となる。

(ニ) 『金泥』の短歌の中で『定本吉井勇全集』に収録されていないものには、漢数字の下に、丸囲みの算用数字で通し番号を付す。総計五三首である。

(ホ) 『金泥』のすべての短歌の出版を明記する。当該歌を含む歌集名、その歌集の見出し（歌題）、追試ができるように『定本吉井勇全集』のページ数・上下段・何首目にあたるかを列記する。具体的には以下の形を取る。

『玄冬』 先達讃歌、俵屋宗達、五七上2

『朝影』 鑑賞余響、大雅堂羅漢図、三九二上1

猶、『金泥』は『京洛史蹟歌』（大雅堂、一九四四年）からも短歌を採っているが、『京洛史蹟歌』は『定本吉井勇全集』には収載されていないため、大雅堂版のページ数を付した。

二、『金泥』の全体像

鷹が峰

一 鷹が峰ここに来りて見はるかす大き眺めにおどろくものか

二 洛中の万戸の家も遠く見え鷹が峰路の眼路のはるけさ

三 玄啄の山莊守の古翁に光悦寺道をたづねけるかも

四 4もの思ひつつ歩む間に過ぎにけり吉野大夫の墓のある寺

五 5大虚庵に來れば人なしただ幽か箒の音の遠くするのみ

六 6夏の日は烈しく照れど光悦の寺に來て知る大き寂しき

七 7竹筒に花もなくして寂しやと思ひをろがむ光悦の墓

八 8了寂院と書きし卒塔婆の木も古りて松笠ばかりこた落ちたる

『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、鷹が峰一九四一

九 9萩の道薄の道のその奥の小笹のみちのはてのその墓

一〇 10 光悦も心幽けくねむるらむ大竹藪の昼のしづもり

一一 11 夏ながら背筋はしるは薄墨の手水鉢よりきたる寒さか

一二 12 光悦の墓ををろがみゐる時は刺せる藪蚊もにくからぬかな

一三 13 紙屋川の川ぞひ道を下らむか光悦の世を恋ふるまにまに

一四 14 光悦寺をおとづれし日の楽しさをわび居の記にはいかに書かまし

『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、鷹が峰一九六一

一五 15 おほらかに光悦が絵に遊びゐし元和の昔思ほゆるかも

一六 16 鷹が峰に光悦ありてうつし世の美しきものいまだ減びず

一七 17 光悦の鹿の時絵の硯箱おもひ見るだにうつつなに居り

一八 18 見ればまづ心や澄まむ鷹が峰といふ銘のある光悦の腕

一九 19 光悦のすぐれし文字の冴えも知る本阿弥切のたふとさも

二〇 20 比叡の山遠くながめて光悦が心ゆたかにありし日おもほゆ

『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、本阿弥光悦一九九二

二一 21 金泥のまばゆき絵をばまへにして老有徳齋在りし日や何時

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、本阿弥光悦一九九三

二二 22 光悦の心ゆたかさ吾も持ちて今日ものどかに比叡を眺めむ

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、本阿弥光悦二〇〇一

二三 23 八十をひとつ越したる光悦の長き一生は楽しきろかも

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、本阿弥光悦二〇〇二

二四 24 秋さむき真葛が原に今日も来ぬ何に憑かれし心なるらむ

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇一

二五 25 このあたり大雅の妻は筆洗の水や棄てけむこほろぎの鳴く

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇二

二六 26 秋ふかき真葛が原の夕さむみ俳諧料理食うべむとゆく

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇二

二七 27 風流に人遊びしはいつの世か西行庵の小文いま亡く

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇三

二八 28 虚子のことそこはかとなく思はする京饌寮の夕灯かも

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇三

二九 29 ただここに来るを樂しと思ひるぬ大雅の忌さへいつと知らなく

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、真葛が原二〇〇三

三〇 30 いまもなほ絵の仙としておほらかに九霞山樵嘯きたまへ

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇四一

三一 31 貧大雅祇園に絵をば売りし日の垢染み布子思へばさびしも

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇五一

三二 32 大雅の絵ながめてありぬ飄々とたましひいまか空を飛ぶ

かに 『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇五二

三三 33 去年の秋見たる大雅の羅漢図のなかに描かれむ吾としも

がな 『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇五三

三四 34 貧しさに馴れては妻の玉瀾も描き棄て反古の紙衾着る

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇六一

三五 35 大雅堂住みしと思へば京さむき真葛が原もなつかしきかな

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇六二

三六 36 伽羅にまし白檀にまし沈にまし高しとおもふ大雅墨の香

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇六三

三七 37 その弟子の描ける大雅の家の図のなかの竹門おもしろき

かも 『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇七二

三八 38 飄然と大雅現れ来るこちして真葛が原をゆけばおもしろ

『京洛史蹟歌』芸文遺蹤、大雅堂二〇七二

羅漢図

初秋の一日京都博物館にゆきて、大雅堂描くところの五百羅漢の大幅を観る

三九 39 つと入れば百間の壁雲湧きて羅漢の浄土あらはれにけり

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上1

四〇 40 筆のあと縹渺たりや大雅堂おのれ羅漢となりて描きけむ

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上2

四一 41 蓮の実を持てる羅漢の寝げ顔ながめてありぬ心のどけく

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上3

四二 42 磊塊を吐き出すごとくあけて高く笑へる髯羅漢かも

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上4

四三 43 岩の上のあぐらゐる羅漢頭に載せし囊のなかにあるものや

何

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上5
四四44そのなかゆ雲かも湧けと念ずらし目つぶり羅漢鉄鉢を抱

く

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二上6
四五45獅子の背に跨がりながら眠りある羅漢の顔のたふとかる

かな

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二下1
四六46世のくだち怒るや国を憂ふるや太眉羅漢何をのしる

四七

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二下2
四七47榮しげに大雅描けば羅漢鼻いや尖れるもおもしろきかも

四八

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二下3
四八48われもまた羅漢をまなび何ごととも忘れて腹を撫でてあら

四九

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二下4
四九49しづかなる秋の真昼や絵のなかの羅漢のあくびいまか聴

こゆる

『朝影』鑑賞余響、大雅堂羅漢図三九二下5
五〇①宗達の保元屏風のめでたさは御物なればか見るよしもな

し

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七上2
五一②絵は残れその人のことつばらかに世に知られぬもなつか

しきかな

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七上3
五二③今日はこころ豊かにあらむ宗達の源氏屏風を胸に描きて

五三

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七上4
五三④かくながく残ると知らず榮しげに劉青軒は屏風絵を描く

五四

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七上5
五四⑤宗達の夢やはこもるうつくしき扇面の絵のひとつびとつ

五五

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七上6
五五⑥うつくしきものを恋しむこころもて宗達在りし世をば思

はむ

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七下1
五六⑦会へば夜を古絵がたりに更かすなり宗達好きの洛北の友

五七

『玄冬』先達讃歌、俵屋宗達五七下2
五七⑧京の夜や遊びのはての寂しさをかたるがごとき宗達の幅

『恋ぐさ』三五四1

『故園』四一六1
大徳寺
五八50紫野施薬所の札かかりたる塔頭の門をさびしみてゆく

五九

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一〇八2
五九51大徳寺明日つとめての接心の座敷まうけの日をば訪ひ来

ぬ

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一〇八3
六〇52石のうへに僧の唐沓脱ぎ棄ててある傍の白木槿のはな

六一

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一〇九1
六一53真珠庵の屋根堀越しに見えてあるその庭隅の白木槿の花

六二

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一〇九2
六二54わがこころしづけくなりぬ襖には探幽の鷺白くねむれる

六三

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一〇九3
六三55案内者の声の低きは堂ちかく和尚午睡の時にあらむ

六四

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一一〇1
六四56遠州のつくりし庭の木に石に禅のこころをもとめてしか

な

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一一〇2
六五57われもまた禅のこころとなりけり明日接心の寺にきた

りて

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一一〇3
六六58いそのかみ年古る釜のうへにある大摺子木はおもしろき

かも

『京洛史蹟歌』古寺巡歴、大徳寺一一〇4
六七59何ゆゑに利休に死をば賜ひけむこの山門に来ては思ふこ

と

『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、大徳寺一〇八一
六八60大徳寺秋のゆふべをひとり来て利休を思ふ落葉踏みつつ

『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一三3

千利休

六九61世に盛るさかしらの茶は知らねども利休の心いささかは

知る

『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一二1

七〇62茶聖の利休の心まなばむと壠をこそ持て手つきあやふ

『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一三1

七一63桃山の城にひとりの利休ゐてなごやかにやたたかひの

世も 『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一三2

七二64夢うつ聴く釜鳴りはかの翁在せし世よりの遠き釜鳴り

『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一四1

七三65利休よりいまにつたはる日本の茶道の深さおもほゆるか

も 『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一四2

七四66茶は知らね利休てふ名にしたしみて伏庵住居四年になり

ぬ 『京洛史蹟歌』 古寺巡歴、千利休一一四3

落柿舎

七五67われもまた京にわび居の身なればかなつかしと思ふ落柿

舎の秋 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二六1

七六68嵯峨日記読めばいつしかわれもまた芭蕉とゐたりひとつ

蚊帳に 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二七1

七七69落柿舎を覚めつつゆけば敷の上ををりり過ぐる雨のし

づけさ 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二七2

七八70耳澄ませば去来の声も聴こゆめり落柿舎にさす夕日しづ

けく 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二七3

七九71落柿舎の壁にかかれる一蓋の笠のころは知るよしもなし
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二八1

八〇72そのむかし去来も往きしことのある嵯峨の野道をゆふべ
たどるも 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二八2

八一73落柿舎を訪へばふと目にうかび来ぬ障子つづくる去来の
すがた 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二八3

八二74寂しさのやりどなければひと掴み落葉を手向く去来の墓
に 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二九1

八三75敷かげの去来の墓の石さむく竹の落葉に鶴あそべる
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二九2

八四76俳諧の寂びと侘びとをそのままに去来の墓の小さきもよ
し 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、落柿舎二二九3

松尾芭蕉

八五⑨寂しともわれはも思はずしめやかに芭蕉の往きし道を恋
しむ 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五七下3

八六⑩今日もわれ炉の辺に在りて思ふなり芭蕉の句境いよよ深
きを 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五七下4

八七⑪夜ごと夜ごとと炉の辺にありて蕉風の俳諧道のはてを極め
む 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五七下6

八八⑫しみじみと芭蕉を恋ふころもて徒然の詞今日も誦
し居り 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五八上1

八九⑬術もなく寂しき夜半は起き出でて猿蓑さがす暗き小棚に
九〇⑭しめやかに芭蕉を思ひゐる夜半ぞ比叡山風さはな吹き
そね 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五八上3

九一 77 旅をゆきわれに曾良なき寂しさをかこちしことも幾たび
ぞそも 『玄冬』 先達讃歌、松尾芭蕉五七下 5

旅ごころ

九二 15 旅ごころそぞろ動けば棚の上の土鈴を取りて鳴る音をぞ
聴く 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 5

九三 16 旅ごころふと起りたり刃にゐて為すこともなく膝組み
居れば 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 1

九四 17 旅ごころひたに堪へつつ朝遅く熱き味噌汁すりけるか
も 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 2

九五 18 旅ごころ堪へえぬ時は彦山の山伏のごとうそぶきにけり
『玄冬』 羈旅旅情旅ごころ、五一上 3

九六 19 旅ごころこも遠野のこちして畳のうへにしばし寝こ
ろぶ 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 4

九七 20 旅ごころ起りてさびし障子貼る妹どもの言ふ飛驒のこと
など 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 5

九八 21 旅ごころ信濃の山を思ひ居ればわが庵居も夏暑からず
『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 6

九九 22 旅ごころ起れど旅にゆきがたしあきらめ心古紀行説む
『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 1

一〇〇 23 旅ごころ過ぎし流離のあとを思ひおのれの一生寂し
みで居り 『玄冬』 羈旅旅情、旅ごころ五一上 3

良寛を思ふ

一〇一 24 良寛をこよひしみじみ思へりと越の御風に消息をせむ
『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 2

一〇二 25 五合庵の夜の寒さをおもへばかわが薄衾いまはかこ

たず 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 3

一〇三 26 良寛はおもしろきかな世をわびてみづからとなふ檻樓
生涯 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 3

一〇四 27 子供等と鞠つき遊びたはむれし良寛思へばわれも寂し
る 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 4

一〇五 28 肩瘦せて囊重しとかこつなり市にもの乞ふ良寛あは
れ 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 5

一〇六 29 つくづくと良寛の字を見てあれば風のごとしも水のご
としも 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 1

一〇七 30 良寛が書き棄てにせし水館の看板の字もにくからなく
に 『玄冬』 先達讃歌、僧良寛六一上 2

神光院

一〇八 78 京にちかき西賀茂村の夕けむり蓮月思へば寂しきろか
も 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一三 1

一〇九 79 蓮月も遠比叡山を日ごと見て老尼ごころ歌は詠みけむ
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一四 1

一一〇 80 世に遠きしづけさおぼゆ夕ちかく神光院の門をくぐ
れば 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一四 3

一一一 81 蓮月の終の栖の古庵の障子の棧の蛾の骸あはれ
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一五 2

一二 82 ただよふはただに昔の匂ひのみ庵さびしも住む人なし
に 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一六 2

一三 83 このあたり行灯ありて机ありて蓮月いまも在すこち
かな 『京洛史蹟歌』 芸文遺蹟、神光院二一六 3

一四 84 われもまた馴寄りてあらめ蓮月が昔凭りたる古き柱に

『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、神光院二二七 2

蓮月抄

一一五 85 蓮月の歌を読みつつやがて吾も心の寂びに思ひいたりぬ
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二八 1

一一六 86 清らなる一生を思ふ蓮月が手づくねの境取りて撫でつ
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二九 1

一一七 87 蓮月尼全集の帙古うして色の落ちつき見るに飽かなく
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二九 2

一一八 88 炉の傍の茶棚の上より吾にむかひ何をか語る蓮月の境
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二九 3

一一九 89 蓮月の文字の細さを寂しみてわれまた今日も取るかこの境
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二〇 1

一二〇 90 土ひねり轆轤廻して尼ひとり清らに在りしその日おもほゆ
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二〇 2

一二一 91 蓮月の長き一生を思ふとき胸底を過ぐ清らなるもの
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、蓮月抄二二一 3

境つくり

一二二 31 これはしも日本の土と思ふゆゑか手触り親しき境つくりかも
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 1

一二三 32 わがまへの轆轤しづかに廻るなり土を手にすれば澄みゆく心
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 2

一二四 33 おのづから己が心をば現はすと思へばこの土おろそかならず
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 3

一二五 34 土ひねりつつ目にうかべ羨しみぬ能牟許の境や道入の境
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 5

一二六 35 くるくると轆轤は廻る然はあれ土は思ふにまかせぬものを
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 4

一二七 36 ぬばたまの小夜のくだちのしづけさや轆轤をとめて蟋蟀を聴く
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 6

一二八 37 蓮月のしづけき心なつかしみ土を手にしぬ境つくるべく
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇上 7

一二九 38 縁厚く歪み曲れど日をひと日手触れ樂しみ得し境ぞこれ
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇下 1

一三〇 39 わがつくる境はつたなしさあれなほ日本の土のゆたか
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇下 2

一三一 40 生土の白埴土のうすじめり手触れてあればわれを忘るる
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇下 3

一三二 41 蓮月の境まへに置き思へらくわれも書かまし釘書きの歌
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇下 4

一三三 42 茶も知らず禅も知らねど日本の土のたふとさやうやくに知る
『玄冬』 続洛北雜詠、境つくり二〇下 5

揮毫兀々

富岡鉄斎の作品を心に描きつつ「揮毫兀々以前年、断送一生涯画禅」といへるその偶吟を思ふ

一三四 92 鉄斎の描ける山にわび居して歌思ひなば樂しからむか
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、富岡鉄斎二二三 2

一三五 93 この翁老てふことのたふとさのみづからつくる絵もて教ふる
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、富岡鉄斎二二三 1

一三六 94 そのひとの命のあとを思ひつつ鉄斎年譜見れば樂しも
『京洛史蹟歌』 芸文遺蹤、富岡鉄斎二二四 1

一三七 95 鉄斎が描ける憶良の古烏帽子曲れる見ればいよ親しく
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、富岡鉄斎二二四 3

一三八 96 鉄斎の絵より起れる嵐気あり見るに面を吹かるごとし
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、富岡鉄斎二二五 1

一三九 ④ おのづから竹に声あるこちして暑さを忘る鉄斎の絵に
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四三下 7

一四〇 ④ 運月も鉄斎も月を見てゐたりこの絵のなかにわれも入らまし
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四三下 6

一四一 ④ 鉄斎の楠公父子の絵を見つつ今日のひと日を心つつしむ
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四四上 1

一四二 ④ 絵にもなほ声あるごときこちして漁樵問答見れど見飽かず
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四三下 5

一四三 ④ 描きしひとなつかしければ絵のなかの陶淵明も親しきろかも
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四四上 2

一四四 ④ 蘭の香か鉄斎の絵の墨の香かいづれかわかね高くすがしも
『玄冬』芸苑遺蹟、鉄斎遺墨四四上 4

栖鳳を悼む

一四五 ④ 信実^{のぶみ}は八十九まで生きたりと思ひ歎けどすべなきかなや
『玄冬』芸苑遺蹟、栖鳳を悼む三九下 3

一四六 ⑤ 八十にひとつ足らざる長寿さへ亡せたまひたるいはかなしも
『玄冬』芸苑遺蹟、栖鳳を悼む四〇上 1

一四七 ⑤ 絵のなかの蛙も今日はなげくめり涅槃^{ねはん}図中の虫類のごと
『玄冬』芸苑遺蹟、栖鳳を悼む四〇上 3

一四八 ⑤ 祇園^{ぎおん}会の鉾^{ぼこ}の墨絵の竹を見て夏来るごとに君をなげかむ
『玄冬』芸苑遺蹟、栖鳳を悼む四〇上 4

一四九 ⑤ 画聖^{えいせい}のあとをしをしのばむ秋はやく栖鳳^{せいほう}の忌を年ごとにし
て
『玄冬』芸苑遺蹟、栖鳳を悼む四〇上 5

栖鳳の冬

栖鳳先生亡き後の高台寺畔の遺邸をおとづれて
詠みける歌

一五〇 97 栖鳳^{せいほう}の忌もやうやくに遠くして高台寺畔^{かうだいじはん}冬は来にけり
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二〇九 1

一五一 98 画ぼとけのまへに香焚きをろがみてわれもしづけき涅槃^{ねはん}図に入る
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一〇 1

一五二 99 つと入れば仏間寒^{ぶつまむ}かりみほとけの絵の深さをば思はするごと
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一〇 2

一五三 100 目を閉ぢて思ふこころのしづけさは栖鳳の絵にしくものぞなき
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一〇 3

一五四 101 父のこと語れるひと髪^{かみ}しろく栖鳳^{せいほう}似額^{にぬかみ}すこしきびしも
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一一 1

一五五 102 栖鳳がしたしみし山東^{ひがしやま}山見つしおもふ京のさむさを
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一一 2

一五六 103 柿食^{かきく}へば腸寒^{はらわた}くなりけり栖鳳ぼとけをろがみしのち
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一一 3

一五七 104 婢^{はしため}が継ぎて去にたる炭^{すす}見てもこころゆくかも亡きひとの絵に
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一二 1

一五八 105 栖鳳が描きたまひたる絵のごときしづけき庭ぞ霜な降りそね
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一二 2

一五九 106 三輪^{みわやま}山の弥勒^{みろく}の谷の石ぼとけ置くにふさへる庭ぞこの庭
『京洛史蹟歌』芸文遺蹟、栖鳳の冬二一二 3

こころ足る

一六〇 107 鉄鉢の絵など描かむと思ひつつ紙に向へばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八上6

一六一 108 はだらはだら髪白めばか慷慨の歌もつくらずわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下1

一六二 109 或るときは己がかたくなを寂しめど遮莫わがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下2

一六三 110 夜ふかく祖国のよさを書きし文読み耽りつつわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下3

一六四 111 出がらしの番茶に咽喉を潤はしてあぐら居ればわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下4

一六五 112 友の描きし愚庵の姿ながめつつ念仏申せばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下5

一六六 113 古袷脱ぎたるのちのさはやかさ空を仰げばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下6

一六七 114 目を閉ぢて風にうごける竹林のさまを思へばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六八下7

一六八 115 筑紫路の旅にて得たる土鈴を振りみ鳴らしみわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上1

一六九 116 いきどほろしきこと思ふ日も遠天の雷聴けばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上2

一七〇 117 いにしへのじやがたら文にあらねども消息書けばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上3

一七一 118 もの読むものうき時は良寛の仮名文字見つわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上4

一七二 119 思ふこと遠くはるけし比叡が嶺を仰ぎてあればわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上5

一七三 120 しづかなる朝の寢覚や雀子のこゑを聴きつつわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上6

一七四 121 わが思ひ知るは汝のみと庭隅の石にもの言ひわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九上7

一七五 122 放庵の安土の寺のふすま絵の木の葉も見つわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九下3

一七六 123 朝ごとの廁にありて竹の葉のそよぐを聴けばわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九下4

一七七 124 魚の骨舌に触れど口馴れし煮ものの味にわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三六九下6

一七八 125 みづからを嘲ける思ひ湧くことも稀にはあれどわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三七〇下4

一七九 126 妹が読む宮本武蔵吾も読みてひと日暮らしつわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三七〇下1

一八〇 127 膝組みて髻の剃杭撫で居ればうつらうつらにわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三七〇下2

一八一 128 夏の夜の衾さむけく時に痢を病むことあれどわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三七〇下3

一八二 129 わびずみは寂しけれども朝歩き夕ありきしてわがこころ足る 『朝影』 洛北籠居、こころ足る 三七〇上2

巻後に

一八三 解説 われすでに鬢白めども三越路の中つ国辺にやはか老いめや 『高志』 二〇年五月号「高志消息」

三、『金泥』の内実

前節の一覧によって、歌集『金泥』のオリジナルテキストと、『定本吉井勇全集』所収『金泥』とが大きく違っていることが確認出来た。「巻後に」の一八三番歌は、『全集』の解説の方に掲出されているので、これを除いて、本文一八二首についてまとめる。全一八二首のうち『全集』に掲出されている歌が一八九首。『全集』で省略されている歌が五三首である。五三首のうち、『玄冬』所収のものが五二首、それ以外の歌集が一首（第一節で述べた(ウ)に該当）である。一二九首には、『玄冬』所収歌一首（第一節で述べた(エ)に該当）が含まれ、それ以外の歌集が一二八首である。これが『金泥』のオリジナルテキストと『全集』所収の『金泥』との関係である。

次に、歌集『金泥』のオリジナルテキストによって、この歌集の内実について考察する。前節の一覧では、『金泥』のすべての歌について、出典を記載することが出来た。このことから明らかなように、『金泥』という歌集は、すべてが既発表の歌で構成されているのである。本文の一八二首のうち、ただ一首を除いて残りのすべては、『朝影』（墨水書房、一九四三年）、『京洛史蹟歌』（大雅堂、一九四四年）、『玄冬』（創元社、一九四四年）の三つの先行歌集から取られたものである、例外の一首は、五七番歌「京の夜や遊びのはての寂しさをかたるがごとき宗達の幅」で、これは『恋ぐさ』（交蘭社、一九二五年）及び『故園』（木原書店、一九四六年、『金泥』の翌年の発行だが、吉井勇は「大正十三年から昭和五年」までの作品と述べて

いる）の所収歌である。「巻後に」の「われすでに鬢白めども三越路の中つ国辺にやはか老いめや」は、吉井勇の八尾疎開中に、富山の翁久允の主催する雑誌「高志」に載せたものである。三歌集の内訳は『朝影』三四首、『京洛史蹟歌』九三首、『玄冬』五四首（『全集』が残している一首を含む）である。この三歌集は、一年余りの間に踵を接して刊行されていることを考慮すれば、『定本吉井勇全集』の『金泥』が、この中から『玄冬』のみを特別視して、『玄冬』に収載されている作品の重複「それらは削除した」とするのは、問題であろう。結果的に『全集』の『金泥』は、『玄冬』の所収歌は削除し、『朝影』『京洛史蹟歌』の所収歌のみで本文を建てており、いたずらに混乱を引き起こすことになっていると思われる。

それでは『金泥』が、既存歌集の短歌で編集する形となったのはなぜか。それは、『金泥』を含む『新日本歌集』という叢書が、戦時中の『決戦歌集』の企画をそのまま移行させたであろうことと、極めて密接な関係があると考えられる。

『新日本歌集』の発行元である八雲書店は、一五年戦争の末期、一九四五年六、七月頃に『決戦歌集』という叢書を企画した。ところが、刊行以前に八月一日の敗戦を迎えたために一冊も刊行されなかった。そのために、全体像は否として不明のままである。僅かに、この叢書として刊行が予定されていた斎藤茂吉「萬軍」と吉井勇「神杉」の二つの歌集だけは入稿原稿が残されており、それらから『決戦歌集』の叢書の姿の一部を窺い知ることが出来るのみである。⁽³⁾また、斎藤茂吉の日記の七月二〇日、二三日の条や、吉井勇の日記七月三〇日の条にも、

「決戦歌集」という名前が見られ、そこからこの叢書について歌人たちへの連絡時期など、いくつかの情報を補うことが出来る。中でも注目されるのは吉井勇の日記の記述である。「午前、八雲書店飯田莫哀氏より来状。決戦歌集といへる叢書を出す由。六十四頁の本にて旧作自選」とあり、「六十四頁」の小冊子で、「旧作自選」という形式であることが分かる。この頃戦争が末期的症状を呈していることは明らかで、八雲書店としては早急に〈決戦歌集〉を刊行したいと思つたのであろう。入稿の時期を早めるべく、書き下ろしではなく旧作で歌人自身が編纂し、規模も極めて小さいものとしたのである。

そうした形をとつても、この叢書は八月一日には間に合わなかつた。上述した『萬軍』『神杉』の原稿は八雲書店に到着していたし、他にも入稿済みの歌集はあつたかも知れないが、ただの一冊も書籍の形となることはなかつた。佐藤佐太郎は「八雲書店が『決戦歌集』と銘うった小歌集を何冊か出す計画をして、岡麓や吉植庄亮などの歌集が出た」と述べるが、〈決戦歌集〉が実際に刊行された気配はない。おそらく岡や吉植に依頼をしたことを佐藤が知っていたか、原稿の進行状況を知っていたかが、こうした物言いになつたのであろう。書籍としては一冊も確認することができない。

ところが敗戦から数日後には、出版元は、早くも〈新日本歌集〉の刊行を決め、歌人たちに連絡してきたのである。八月二五日の吉井勇宛の川田順書簡に「八雲より『新日本歌集』の件大兄へも申越候事と存上候」とある。この日か数日前には川田順のところへこの叢書の連絡が届いているのだから、八雲書

店がこの企画に着手したのは、敗戦から数日以内のことであると推測して間違ひなからう。とすれば〈新日本歌集〉は〈決戦歌集〉の企画をそのまま横滑りさせたものではなからうか。実際に刊行された〈新日本歌集〉のメンバーには、愛国歌・戦争歌を多く詠じた歌人が並ぶこともそのことを強く推測させる。

〈決戦歌集〉を〈新日本歌集〉とする、八雲書店の変わり身の早さについては、改めて考えなければならぬが、わずか数日の間に叢書名を変えたわけであるから、執筆要項などを変更する時間はなかつたはずである。また〈新日本歌集〉は、一月二〇日には一挙八冊を刊行しており（第六節参照）、原稿の依頼から、入稿、印刷、校正、刊行までわずか三ヶ月であつた。極めて短時間に出版された叢書であることも押さえておく必要がある。歌人たちに与えられた時間は、今回も極めて短いものであつた。少なくとも吉井勇は短時日に入稿すべく、〈決戦歌集〉の時と同じように、「旧作自選」の形を取つたのである。猶、〈新日本歌集〉全体については、第六節で詳述する。

吉井勇の『金泥』は、『朝影』『京洛史蹟歌』『玄冬』の三歌集から歌を選んだものであつた。〈決戦歌集〉の一冊として作成された『神杉』の方は『朝影』『霹靂』（一条書房、一九四三年）『玄冬』の「旧作自選」で形成されているのである。すなわち、〈決戦歌集』『神杉』を形成していた三歌集の中から『霹靂』を外して、『京洛史蹟歌』を新たに選歌の対象としたものが『金泥』なのである。もちろん『朝影』や『玄冬』から選ばれた歌も、〈決戦歌集』『神杉』と〈新日本歌集』『金泥』とでは、ほぼすべてが差し替えられている。

新たに加わった『京洛史蹟歌』から取られた歌が九三首、全体の半数を超えていることから明らかなように、『金泥』は、第二の『京洛史蹟歌』とでも呼ぶべきものである。歌集名の由来となった二一番歌「金泥のまばゆき絵をばまへにして老有徳齋在りし日や何時」もやはり『京洛史蹟歌』所収歌であった。

この歌が鷹が峰と本阿弥光悦を歌ったものであるように、真葛が原、大徳寺、落柿舎、神光院、などの京洛の史蹟を辿りながら、それらの史蹟とゆかりの深い池大雅、千利休、松尾芭蕉、大田垣蓮月らを追慕する歌を集めて一つの歌集としたものが『金泥』の内実なのである。

四、『金泥』の構成

歌集『金泥』は、先行する三歌集から秀歌を抜いただけではない。明確な構成意識を持って編集されている。

一例として、冒頭の「鷹が峰」「本阿弥光悦」の二群を見よう。「鷹が峰」の歌群は、鷹が峰に到着して洛中の方を見た遠景が「見はるかす大き眺め」「洛中の万戸の家も遠く」と始まり、次いで近景に転じる。「玄啄の山莊守」に「光悦寺道をたづね」て、歩むうちに「吉野大夫の墓のある寺」を通り過ぎ、「大虚庵」に到着する。光悦寺を訪ねると、「夏の日は烈し」い中でも、「大き寂しき」や、「背筋はしる」「寒さ」を感じるほどであった。手向けられる花もなく偉大なる先人が静かに眠る「寂し」さを繰り返し描写した後、「光悦の墓ををろがみゐる時は刺せる藪蚊もにくからぬかな」と軽やかに転じ、「紙屋川の川ぞひ道を下」って帰途につき、今日一日の記憶を

「わび居の記にはいかに書かまし」と結ぶ。つづく「本阿弥光悦」の歌群では、光悦の「鹿の蒔絵の硯箱」「鷹が峰といふ銘のある光悦の唄」「本阿弥切」などが次々と取り上げられ、「光悦の長き一生」に思いを馳せる形で、この二つの歌群は閉じられる。元の『京洛史蹟歌』『芸文遺蹤』の排列を生かしたものであるが、そのことは、引用されているのは個々の短歌だけではなく、連作で構成される世界も含めてのものであると考えるべきであろう。

先行する歌集を組み合わせ、『金泥』が新たに作り上げる世界もある。九番目の歌群「落柿舎」は『京洛史蹟歌』『芸文遺蹤』のものであるが、これに「玄冬」「先達讃歌」の「松尾芭蕉」をつないだ意図は明白であろう。次の「旅ごころ」は、同じ「玄冬」でも、「先達讃歌」ではなく「羈旅旅情」の項目から引用されており、「彦山」「遠野」「飛驒」など地名が散在することから、流離の思い一般を詠じたものである。しかし、「松尾芭蕉」の歌群の後ろに置かれることによって、まるで芭蕉に触発されて旅に出て行くように読める仕掛けとなっているのである。

歌集『金泥』の後半部では、「神光院」「蓮月抄」「唄つくり」「揮毫兀々」と三七首を連ねて、大田垣蓮月と富岡鉄斎の師弟を取り上げている。「神光院」「蓮月抄」「揮毫兀々」が、『京洛史蹟歌』『芸文遺蹤』を淵源とし、「唄つくり」は「玄冬」「続洛北雑詠」を淵源とする。蓮月その人を詠じた「神光院」「蓮月抄」と、鉄斎の作品を扱った「揮毫兀々」を直結させるのではなくて、蓮月と縁のある「唄つくり」歌群を間に挟むことに

よって、ゆるやかに両者がつながる働きをしていると思われる。また「揮毫兀々」歌群も、『京洛史蹟歌』『玄冬』を組み合わせて量的拡大を図り、「神光院」に始まる蓮月の大きな歌群に対して、バランスを保とうとしたものであろう。

竹内栖鳳に関して言えば、『玄冬』から引用した「栖鳳を悼む」と、『京洛史蹟歌』から引用した「栖鳳の冬」の二つの歌群で形成されているが、ここでは前者の末尾の歌と、後者の冒頭の歌に、ともに「栖鳳の忌」という語を有する歌を置いて連接をはかっている。

『金泥』のオリジナルテキストに拠ることによって、この歌集の構成意識、編集意識、様々な工夫を明確に知ることが出来るのである。

五、「こころ足る」歌群から

歌集『金泥』は、光悦・大雅・利休・蓮月らの先人と京都の史蹟とを組み合わせたもので、極めて具体的な歌材で形成されているが、最後の「こころ足る」歌群だけは異質である。全二三首から構成されており、『金泥』の歌題の中では、最も多くの歌を持つものである。歌集の末尾に置かれたことといい、最大の歌数を持つことといい、「こころ足る」歌群は、歌集『金泥』の総論的役割を与えられているのではないかと思量させられるものがある。

総論と言っても、各論・各説にあたる史蹟や先人への敬慕の歌の延長線上にあることは間違いない。一六八番「筑紫路の旅にて得たる土鈴を振りみ鳴らしみわがこころ足る」は「旅ご

ろ」歌群と緊密なものがあるし、一七一番「もの読むものうき時は良寛の仮名文字見つわがこころ足る」は「良寛を思ふ」の歌群の中に置いても違和感のないものである。ほかに、一六五番「友の描きし愚庵の姿ながめつつ念仏申せばわがこころ足る」、一六七番「目を閉ぢて風にうごける竹林のさまを思へばわがこころ足る」、一七五番「放庵の安土の寺のふすま絵の朴の葉も見つわがこころ足る」など、それ以前の歌群に通底するものがある。

その一方で、一六四番「出がらしの番茶に咽喉を潤ほしてあぐらる居ればわがこころ足る」、一六六番「古拾脱ぎたるのちのさはやかき空を仰げばわがこころ足る」、一七七番「魚の骨舌に触れど口馴れし煮ものの味にわがこころ足る」のように、日常のさりげない一コマの中に自足の思いを巧みに詠み込んだものがあり、一六一番「はだらはだら髪白めばか慷慨の歌もつくらずわがこころ足る」、一七八番「みづからを嘲ける思ひ湧くことも稀にはあれどわがこころ足る」のように、年齢を重ねて慷慨、自嘲の思いを飼い慣らす術も得て、一七四番「わが思ひ知るは汝のみと庭隅の石にもの言ひわがこころ足る」という境地へとたどり着いたのである。また、一七三番「しづかなる朝の寝覚めや雀子のこゑを聴きつつわがこころ足る」などは、人生の嵐の後の安住の思いを遺憾なく述べたものである。

先人と対話し旧蹟を訪ねることで、静かな時間の中に身を置く喜びのようなものを歌った『金泥』の本質を、「こころ足る」歌群は、また別の形で提示したものである。

人生の嵐の後の安住の思い、と述べたが、それは出口のない

日中戦争がそのまま太平洋戦争に拡大し、敗戦という形で漸く終結を迎えた日本の状況とも通じるところがある。『金泥』が「先を争うように求められていった⁽⁹⁾」ということがあったとすれば、それは上のような事情も参与したに違いない。ただ、特に強調しておきたいのは、『金泥』の色調を明確に示す「こころ足る」歌群は戦後作られたものではなく、戦争中の一九四三年に刊行された『朝影』に収録されたものであることである。威勢の良い発言が席卷する時代において、吉井勇も又戦争を詠じることがなかったわけではないが、その一方で、こうした自己に沈潜する歌を多く作っていたことは顧みられて良いだろう。それは遡れば、歌集『朝影』の評価の問題にもつながってくるのであるが、ここでは問題の提示にのみ留めておく。

吉井勇は、初句や結句に同じ表現を用いて連作をすることが少なくない。『金泥』にも「わがこころ足る」で締めくくる二首の他にも、「旅ごころ」を初句におく九首がある。「旅ごころ」という具体的・限定的な表現の歌群に比べると、「こころ足る」歌群の方が、さまざまな内容を詠み込むことが可能であり、表現の幅の広さという点では優れている。歌集『天彦』（甲鳥書林、一九三九年）冒頭の「寂しければ」「続寂しければ」の長大な歌群にも匹敵する、吉井勇の短歌全体を考える上でも重要な歌群である。

六、〈新日本歌集〉について

ここで『金泥』を含む〈新日本歌集〉全体に関して述べておく。

『金泥』の巻末には〈新日本歌集〉の書名一覧が附されている。掲載順に、川田順『夕陽居歌抄』、吉井勇『金泥』、土岐善麿『秋晴』、吉植庄亮『稲の花粉』、結城哀草果『鶏鳴』、佐佐木信綱『黎明』、斎藤瀧『光土』、下村海南『蘇鉄』、釈迺空『山の端』、斎藤茂吉『題未定』、岡麓『土大根』の十一冊である。「A6判六四頁・中川一政装幀」「各冊 定価一円五十銭」とも記されている。「六四頁」は、第三節で引用した吉井勇の『日記』に記された〈決戦歌集〉の頁数と一致する。

これらのメンバーを見ると、戦時中愛国歌を多く詠じた人物が多いことに気がつく。戦時下の象徴のような「愛国百人一首」の選者に名を連ねていた、佐佐木信綱・斎藤茂吉・斎藤瀧・川田順・釈迺空・吉植庄亮らが網羅されている。後述する土屋文明もまた『愛国百人一首』の選者であった。「新日本」と命名された歌集の叢書は、こうした人々の歌集を集めたものであることを留意する必要がある⁽¹⁰⁾。

さて、このリストの中で、川田順『夕陽居歌抄』から下村海南『蘇鉄』までの八冊が、一九四六年一月二〇日に同時に刊行されている。敗戦から三か月のスピード刊行である。最後の三冊が十一月刊行には間に合わなかったものである。リストは一挙刊行の八冊を前に、続刊予定として三冊を後ろに並べた形である。この『金泥』巻末のリストの一人が、この叢書の最終企画であったと思われる。最終と言ったのは、『金泥』と同じく十一月に刊行された歌集の中で、『光土』『黎明』『蘇鉄』の三冊の巻末目録には、もう一人「土屋文明 題未定」と記されているのである。土屋文明も当初はこの叢書に参加する予定

であつたようだ。それが何らかの事情で、この企画から撤退したのであろう。

一月に間に合わなかつた三人のうち、岡麓『土大根』が次に、翌四六年一月に刊行される。⁽¹²⁾「題未定」であつた斎藤茂吉の歌集が『浅流』として刊行されるのが同年四月、釈超空『山の端』が同六月の出版で、『金泥』巻末のリストにあつた一人の歌集はすべて刊行されている。遅れて刊行された三冊のうち、岡麓『土大根』は、一月刊行の八冊と同一の装幀であるのだが、斎藤茂吉『浅流』と釈超空『山の端』の二冊は、装幀も、判型もまったく異なるのである。『土大根』までの九冊は、巻末リストに言うようにA6判で、扉には「新日本歌集」と朱で印字され、朱の陰刻で「一政」と記されている。これが、『浅流』『山の端』の二冊は四六判と判型が大きくなり、扉に「新日本歌集」の文字も「一政」の印もない。表紙も全く異なり、前の九冊が戦争直後の粗末な本であるのに対して、こちらの二冊はやや厚手の比較的良好な表紙が附されている。ただ、判型の大きな二冊も、本文の組み方は先の九冊と同じで、活字も小さな九ポイント活字のままであり、四六判の紙に不自然なほど中央にまとめて印字されている。おそらく、当初のA6判の『新日本歌集』の形で活字を組んだものの、用紙に余裕が出来たためか、四六判の本としたために、こうしたバランスの悪い本となつたのであろう。扉も変わっているから『新日本歌集』という名前は『浅流』『山の端』のどこにも見えない。定価も変わっている。⁽¹³⁾奥付は同じ型を流用したためか、奥付の枠の右外に「装幀 中川一政」となっているが、中川一政の装幀では

ない。版元が誤つてこの部分を残してしまつたのであろう。書誌情報などで、『浅流』『山の端』を中川一政の装幀としているのは訂正されなければならない。⁽¹⁴⁾

この『新日本歌集』の企画過程を窺わせる貴重な資料がある。『斎藤茂吉全集』第三五巻（岩波書店、一九七五年）に収載されている、一九四五年八月（日不詳）の土屋文明宛の書簡（書簡番号五五一〇）である。それには「土岐善麿その他より貴堂の御宿所たづねまゐり候につき御知らせ申上げおき候、八雲書店から、皆のもの小歌集にして出すといふにより、兎に角、承諾し置き候、大兄も御承託のほど御願上候 大兄の方は、大兄、小生、吉井、土岐、吉植等の割当の如くに御座候、岡先生にも御依頼の意向に候」と記されている。一九四五年八月に「八雲書店から」とある以上、この「小歌集」は、敗戦以前なら『決戦歌集』、敗戦以後なら『新日本歌集』である。敗戦間近の混乱した様子が見られないから、これは戦後、八月下旬あたりにかかれたものでもあろうか。「皆のもの」という言い方も、すでに一定のメンバーが斎藤茂吉の頭にあつて、その人々の「小歌集」とあることから、『決戦歌集』のために糾合されていたメンバーの歌集を別の形として出す計画と理解しているのであろう。

斎藤茂吉の日記に名前が見られる、「吉井（勇）」「土岐（善麿）」「吉植（庄亮）」「岡（麓）」、それに手紙の発信者斎藤茂吉、すべて『新日本歌集』のメンバーである。おそらく、土岐善麿が『新日本歌集』のことで土屋文明に連絡を取る必要があつて、斎藤茂吉に住所を尋ねたのではないか。受信者の土屋文

明も、一時『新日本歌集』の出版予定書目に名前が挙がっていたことは上述したところである。「大兄の方は」「割当」というのは、土屋文明が、この叢書の中である程度人数のまとめ役を期待されているのではなからうか。『アララギ』の岡麓、斎藤茂吉、土屋文明に「吉井（勇）」「土岐（善麿）」「吉植（庄亮）」を含めて一つのグループと考えればよいのではないか。『アララギ』の歌人であっても結城哀草果がこの中に入っていないのは、茂吉が書き落としたためであろうか。¹⁶⁾

『新日本歌集』の残りのメンバーを見ると、佐佐木信綱、下村海南、斎藤瀏、川田順と『心の花』系の歌人に、釈迢空が加わった形である。こちらは川田順あたりがまとめ役であろうか。『新日本歌集』、さかのぼれば『決戦歌集』は、『アララギ』、『心の花』の二大結社を中心に計画が進められたのかもしれない。

七、残された問題

最後に、残されたいくつかの問題について簡単に触れておく。

まず、『金泥』の歌は、本来に『朝影』『京洛史蹟歌』『玄冬』の三歌集から抽出されたとして良いかという確認が必要である。吉井勇は、自己の秀歌を複数の歌集に重出させることがある。『金泥』に選ばれた歌も、他の歌集でも見られるものがある。それらの歌集の中で、特に留意しなければならないのは、吉井勇の友人でもある山崎斌の草木屋出版部から刊行された『月明先人集』（一九四四年）である。刊行も『京洛史蹟歌』

『玄冬』と同年、光悦、利休、芭蕉、大雅らに関する歌を集めたもので、内容の上で『金泥』に重なる部分が多い。実際「本阿弥光悦」の歌などは『京洛史蹟歌』『月明先人集』の両方とほとんど重なるものである。しかし、歌の排列は『金泥』と『京洛史蹟歌』が同じであるのに対して、『月明先人集』では歌順が多少異なっている。さらに次の例からなどから、『金泥』は『月明先人集』ではなく、『京洛史蹟歌』の方から採取したと、断じて良いと思われる。

一六番歌「鷹が峰に光悦ありてうつし世の美しきものいまだ減びず」は『京洛史蹟歌』と同文である。これが『月明先人集』本阿弥光悦、七八頁では、二句の後半以降が「光悦ありし世よりなほ美しきこと語り継ぐがね」となっている。こうした例から、『金泥』が『月明先人集』から採取した可能性は低く、『京洛史蹟歌』などの三歌集から歌を選んだものと考えて良からう。『金泥』と、『京洛史蹟歌』などの三歌集との異同は多くはないが、六番歌の第二句「烈しく照れど」が『朝影』では「明るく照れど」であった例などがある。¹⁷⁾

次に、『決戦歌集』『神杉』と『新日本歌集』『金泥』との関係について。敗戦という大変動を間に挟んでいるので、当然この二つの歌集は内容的に断絶しているのだが、意外なことに共通する歌もあるのである。それは、一六一番歌「はだらはだら髪白めばか慷慨の歌もつくらずわがこころ足る」、一六九番歌「いきどほろしきこと思ふ日も遠天の雷聴けばわがこころ足る」など「こころ足る」歌群に三首見られるほか、「巻後に」の「われすでに髪白めども三越路の中つ国辺にやはか老いめ

や」もまた、『神杉』と『金泥』とに共通するものである。これは、吉井勇が未だ『決戦歌集』の時代を引きずっているのではなく、そもそも『決戦歌集』の中に「豆腐の歌」や「こころ足る」など自己を内省したり自然に目を向ける姿勢の歌が少なかつたことに依るものでもあらう。

戦争と短歌、戦争と歌人の問題は、避けて通ることの出来ない重要な問題であるが、その分析が極めて困難なものでもある。今日の立場から一方的に断罪することが非生産的であるのは言うまでもないが、誰もがそうであった、そういう時代であったと、やむを得ないことにひとしなみに棚上げにすることは、一層問題である。あくまでも、一人一人の歌人が戦時下でどのような動きをしたのか、一つ一つの歌集を丁寧に見て戦意高揚の内実はどのようなものであったのか、個別に丁寧に再検討する作業こそが必要である。そうした基礎作業にも必要であると考えて、『金泥』の本文提供と、考察を行ったものが本稿である。

注

- (1) 国会図書館は所蔵せず、Ciniiによれば一六大学が所蔵するのみ。
- (2) 公的機関の所蔵本を調査した限りでは、京都府立京都学・歴史館のものが最も保存が良かった。手元に数部集めてみたがいずれも美本とはいえない。
- (3) 斎藤茂吉の『萬軍』に関しては、秋葉四郎『茂吉幻の歌集』『萬軍』戦争と斎藤茂吉(岩波書店、二〇一二年)が最も詳しい。『神杉』については、二〇一九年一〇月の和歌文学会大会で稿者が

報告した。

- (4) 七月二〇日『決戦歌集(八雲書店)』ヲ編センコトラ急ニオモヒ選ビナガラ書簡巻紙ニ書イテ行キ百二十首アマリヲ選ンデタニ至ツタ、二三日「八雲書店ヨリ電報ハ決戦歌集ノ催促デアツタ」。本文は『斎藤茂吉全集』三三巻(岩波書店、一九七五年)に拠る、ただし漢字を通行のものに改めた。
- (5) 本文は細川光洋「吉井勇の戦中疎開日記(中)―『統北陸日記』」(静岡県立大学国際関係学部「国際関係・比較文化研究」一七巻一、二〇一八年九月)に拠る、ただし漢字を通行のものに改めた。
- (6) 「短歌を味わうこころ」(角川選書、一九八八年)、『佐藤佐太郎集』第五巻(岩波書店、二〇〇二年)にも所収。
- (7) 田坂「吉井勇と川田順 昭和二十年前後の書簡を中心に」(同志社大学『社会科学』四六巻四号、二〇一七年二月)。
- (8) 共通する歌は「こころ足る」歌群の三首と、「巻後に」の一首である。七節参照。
- (9) 木俣修「吉井勇研究」(番町書房、一九七七年)。
- (10) 『定本吉井勇全集』の『朝影』の巻末解説は、書誌的解説の後、吉井自身の後記を引用するが、それ以外では「昭和十六年十二月は太平洋戦争が開始された時であるから、この集にはその『大詔』に対する感動、緒戦の捷報に対する讃歌などのあることは当然であろう。『御民吾』といった章にそれらが集められている」とだけ記されている。これは、この歌集に対する印象を著しく損なうものではないか。『朝影』は「比叡鑑法」「洛北籠居」「京洛往來」「御民吾」「鑑賞余響」「近畿遊草」「続草廬漫歌」「土佐路の旅」「信濃路の旅」の歌群から構成されており、戦争讃歌はその一部に過ぎない。個々の歌人研究の範囲内で戦争との関わりを究明した好著は多いが、複数の歌人を広い視野で取り上げたものとして、三枝昂之『昭和短歌の精神史』(本阿弥書店、二〇〇五年)、小木宏『歌人の戦争責任』(ながらみ書房、二〇一二年)などがある。
- (11) 『新日本歌集』は時代も時代であるため、極めて粗末な造本で印刷も悪く、判読に苦労するのであるが、『土大根』だけは『歌稿土

大根」(柳沢書苑、一九七〇年)という形でも読むことが出来る。他に『全歌集』『全集』等に再録されたものはいくつかある。

- (13) 一九四六年一月刊行の『土大根』までは予告通り一円五〇銭。四六判の『浅流』『山の端』は定価五円、ただし戦後のインフレで定価は次々と変わったようである。『浅流』初版には定価の欄の上に四〇円の紙片が貼られたものもある。

- (14) 奥付の誤記ではあるが、そのまま転記すれば誤解を広めることになる。『浅流』『山の端』の装幀に言及する場合は、「ママ」と表記するか、「実際には中川の装幀ではない」、などと記しておくべきであろう。

- (15) 意味が鮮明になるように、「大兄の方は」の前に一字分空白をもつけた。

- (16) 戦後の証言であるが、八雲書店の社員であった飯田莫哀は、決戦歌集の段階から、結城哀草果も、土屋文明もメンバーに入っているとしている。〔『黎明』覚書〕『心の花』佐佐木信綱追悼号、一九六四年四月号。

- (17) 同様の例を列挙する。一四番歌第一句「光悦寺を」『京洛史蹟歌』「光悦寺」、六三番歌第三句「堂ちかく」『京洛史蹟歌』「堂ちかく」、六八番歌第五句「落葉踏みつつ」『京洛史蹟歌』「落葉のなかに」、八六番第二句「炉の辺にありて」『玄冬』「炉辺にありて」、八八番歌第三句「芭蕉を恋ふる」『玄冬』「芭蕉をしたふ」、一二〇番第二句「轆轤廻して」『京洛史蹟歌』「轆轤を廻し」。中でも六八番第五句は、「月明先人集」では「吾のほひに」であるから、「金泥」が『京洛史蹟歌』に拠って、少し手を加えていることが分かる例である。

- (18) 『神杉』については別稿を予定している。

(追記)

資料調査に御厚配を賜った関係各位、取り分け京都府立京都学・歴史館に感謝申し上げます。